

(参考1)

(平成12月2日リスクコミュニケーション専門調査会第3回会合での関澤座長講演の要約)

食品の安全性の確保に当たっては、原子力、化学物質、環境の問題と並びリスクコミュニケーションが大切となるが、食品は子供から高齢者、病弱者と健康な人など全ての人に関わる点で他と大きく異なっている。マスコミやインターネット上に食品の安全性に関する情報は氾濫しているが、必ずしもさまざまな人々が知りたい事柄について適切で信頼性の高い情報を提供しているとはいえない。

科学的で、透明性の高い食品の安全性の確保の手法として、リスク分析の考え方がFAOやWHOなどにより重要であると国際的に認められている。FAO/WHOによれば、リスク分析は、リスク評価、リスク管理、リスクコミュニケーションをその3要素とするがそれぞれは以下のようなものである。

リスク評価：その時点で入手可能なすべてのデータを総合して、科学的に評価を行い、指針を提示する。

リスク管理：安全管理の選択肢の検討、実施、モニタリング、再評価のための情報提供。技術的可能性、コストパフォーマンスなどを考慮して選択肢を用意して実施する。

リスクコミュニケーション：生産から消費に至る全ての関係者間の情報共有と役割をもった参加を保証する。情報公開だけでは不十分。

リスクコミュニケーションの位置づけ：食品に含まれる危害要因とこれに関する情報や意見を的確に伝え理解することは、食品安全管理の不可欠な要素。国際機関、政府、業界、消費者その他の関係者の参加が必要。

リスクコミュニケーションの実際：信頼できる情報源の確立。透明性の確保。責任の分担。相互理解の推進。コミュニケーションの専門的能力の確立。科学と価値判断の区別と両者の重要性の確認。

平常時のリスクコミュニケーションと緊急時のリスクコミュニケーションの区別：緊急時には、事後の見直しを前提とした効果的な危機管理のための計画とパニックを回避し、実際的な行動指針を提供するためのコミュニケーション・チャンネルが必要。平常時には食品安全に関する教育や常日頃問題とされている事柄について科学的な情報だけでなく実行可能性を含む関係者間の意見交換と理解の推進による問題解決の促進などが必要となる。

以上のように国際機関や欧米ではリスク分析の一環としてのリスクコミュニケーションについてさまざまな試みが行われ、食品の安全性確保のための施策に反映されており、我々も参考とできる。

